
IS<インフィニット・ストラトス>一夏の兄は転生者？

ジェナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス<一夏の兄は転生者？

【Nコード】

N9369W

【作者名】

ジェナス

【あらすじ】

この物語は作者の妄想が爆発してしまい書き始めたものです。主人公が転生し、織斑家の一員として大切な人たちを守るためにがんばるといふ何番煎じか分からないありきたりな物です。基本一夏ラヴァーズは一部を除いてそのまま一夏にフラグを立たせます。千冬、東、更識姉妹がこの作品のヒロインになります。いろいろと無理矢理がこの作品の代名詞になりそうなのでそういうものが嫌いな方はそのまま戻るのボタンを押してください

プロローグ（前書き）

やってしまった。更新が止まってる作品があるのにやってしまった。

いや、俺は悪くない、悪いのはESを愛する俺の欲望だ！

と言いつつで（どっいつのことだよ）プロローグをどうぞ。

プロローグ

ーグ

俺は今何もないただ真っ白な空間の中にいる。

プロロ

「此処はどこだ？確か俺は・・・あれ？何故か思い出せない」

俺は此処に来る直前の事を思い出そうとしたが何も思い出せない。

「落ち着け、まずは今の俺の状況を考えよう。俺の名前は・・・
何故だ、俺の事も何も思い出せない」

俺は行き成り言い表しようのない恐怖に襲われた。

3

「俺はいつたい誰なんだ、そして此処は」

「やはり混乱しとるようじゃのう」

行き成り声がしたので後ろを振り向くとそこには白い髭を生やした老人がいた。

「アンタは？」

「ワシか？　ワシは俗に言う神じゃ。まあ単なる世界の管理人じゃ」

老人は行き成り自分のことを神だと言ったがなんとなく理解が出来た。

「それじゃあ神様、俺はいつたい何なんだ？　そして俺はなんでここにいるんだ？」

「まずは自分のことが知りたいか、それならかなり酷い頭痛がするが良いか？」

「ああ、構わない」

そして神様は俺の頭に手を当てると行き成り酷い頭痛がした。俺は何故か自分の手を噛み自分の舌を噛まないようにした。

暫くして頭痛が行き成りなくなり俺のことが1つの事を除いて分かった。

それは俺は此処に来る前ある古流剣術の党首で俗に言う暗部の1人として裏の社会の住人だったという事、

同じく暗部として働いていた弟が2人、弟子が2人、血のつながっていないなかった妹が1人いた事此処にきた理由は目の前でトラックに轢かれそうになっていた少女を助けたさい

頭部を強く打ち即死、その際に記憶を無くした事、そして俺が弟や弟子の影響でオタクだったって言う事だ。

「思い出したかのう?」

「全部じゃないがな、まさか俺がよくある二次創作物みたいにこんなところに来るとは思っていなかったけどな」

如何しても俺の名前が思い出せなかった。だが俺はそこに何故か後悔がなかった。

「やはり全ては思い出せなかったか、さて大体この状況で分かっていると思うが転生してもらおう」

「何故に?」

「うむ、ワシが君の書類を間違えて死神に渡してしまっただけ」

「1発殴っていい? それとその死神って何番隊の人?」

「別に日本刀振り回してはおらぬぞ、それと本当にすまなかった」

「はあ、それじゃあどい?」

「ISの世界じゃ」

「Pardon?」

「だからIS<インフィニット・ストラトス>の世界じゃ、もちろんISも動くようにするぞ」

それを聞いた俺はうずくまった。

「ん？ どうしたのじゃ？」

「ヨッシャー、「フゴ！」 俺身一つで空飛んでみたかったんだよねありがと！ ってどうしたん？」

俺が喜んでいると神様は顎を押さえながら蹲っていた。

「お主、さっきとキャラが違くな？」

「うん、よく言われる」

「それで何か要望はあるか？」

「ん、俗に言うチートって奴か？」

「そうじゃ、しかし世界観を壊すような事はだめじゃぞ」

「うん、それじゃあまずは生前の技とか経験をそのまま受け継ぐことと頭脳はISのコアを作るぐらいの天才で」

「うん、それじゃあ思い切ってGNドライブ作れるぐらいの頭脳にしておこう、しかもオリジナルGNドライブを地球で作れるぐらい」

「え？ やりすぎじゃ？」

「正確に言ってお主が行く世界は原作とは違った並行世界じゃから多少は大丈夫じゃ……多分」

「それなら大丈夫かな？ 自分のISはそのくらいの頭脳があれば自分で作れるだろうし」

「それともう一つ特典をつけておくからのそれじゃあ逝って来い」

「え？ ちょっと漢字違くない？ ってぎゃあああああああああああああああ
あああ」

神様が凄い笑顔でそう言つと行き成り俺の下に穴が開きそこへ俺は落ちて行った。

第一話（前書き）

今回は織斑家との出会いです。

第一話

穴から落ちて目が覚めるとそこは何処かの公園だった。そしていまの服装を見ているとすごくぼろぼろだった。

「ぼろぼろだな、ん？ それにしてもなんか視線が低いような？」

視線の低さに違和感を覚えた俺は今の状況を知るために公園から出ようとしたがまず一歩目でこけた。

「イッテエー、いったい何がってコレは筒？」

俺はその筒を拾い上げ蓋があつたのであけるとそこにはメモがあった。

そしてそこには

言い忘れて追つたがその世界でのお主の名前は百秋はくあじゃからよろしく！

あと今のお主は5歳で一夏と同じ年じゃ、もちろん親はおらぬぞ

神より

なんじゃそりゃああああああああああああそういう事は早く言えよ！というより5歳で親がいないんじゃ仕事も出来ないじゃないか！

転生して直ぐにも命の危機じゃねえか原作はいる前に死にたくないよ。どうすればいいんだー

「ねえ、君どうしたの?」

俺が頭を抱えていると後ろから声をかけられたので振り返ると俺と同じ年くらいの男の子が話しかけてきた。

「えっと、親がいなくてどうしようもないんだ」

えっとら歳児の喋り方ってこんな感じでよかったけ?

「君もなの? ぼくもなんだ。あ! まだ自己しようかいしてなかったね、ぼくは一夏、おりむら一夏だよ」

あゝ、やっぱり一夏だったかどことなく似ている気がしていたからもしかしてって思ったけどやっぱりそうだったか

「えっと、ぼくは百秋って言うんだ。苗字も親のこともおぼえてないんだ」

「それならばくの家に来る?」

「え? いいの?」

「うん、千冬姉が良いっていえば多分大丈夫だよ。千冬姉が帰ってくるまでもう少し時間がかかるからそれまで遊ば」

「うん!」

うんこのままいつちゃっていいのか? まあ正直言って住むところはおるか金もないから嬉しいんだけど

そして俺は暫くの間一夏と一緒に遊んでいた。するとセーラー服を着た女性がこっちにやってくるのがわかった。

「一夏、珍しいじゃないかこの時間まで遊んでいるなんて、で、その子はいつたい誰なんだ」

千冬さんが俺に目茶苦茶警戒心を丸出しで俺のことを一夏に聞いていた。

「千冬姉、いつも言ってるでしょ。そうやって直ぐに人を睨んじやダメって」

「うっ、すまなかつたそれで君は？」

「えっと、百秋です」

「百秋君か。どうして君はそんなにもボロボロな服を着てるんだ？」

「記憶がないんです。ぼくが百秋って言う名前しか覚えていないんです」

俺がそう言つと千冬さんを包んでいたオーラのものが相手を突き刺すような感じから包み込むような感じに変わった。

「それじゃあ帰る家は？」

「覚えていません、もちろん両親の事も何も」

「そうか、それなら家に来るといい今日からお前も私達の家族の一員だ。いいな一夏」

「うん！」

そして俺は今日この日から織斑百秋と言う人物になった

第一話（後書き）

ジエナス 「今回からここではゲストを座談会みたいな事をしていきたいと思います。」

記念すべき第1回目のゲストはこの小説の主人公織斑百秋くんに来てもらいました」

百秋 「始めまして織斑百秋です。それじゃあ作者まず謝ろうか」

ジエナス 「え？ なんで」

百秋 「小説情報」

ジエナス 「ウツ、確かに。えっと前回初投稿時に小説情報で一夏ラヴァーズは一夏にそのままフラグを建たせると書きましたが、話を書いていくうちにラウラとシャルにフラグを建たせるのが困難になりましたので百秋に建たせる事になりました。一夏ファン、ブラツクラビツ党並びにシャルロッツ党の皆さん本当に申し訳ありませんでした」（土下座）

百秋 「ちゃんと考えて書かないからそうなるんだ」

ジエナス 「はい、仰るとおりです」

百秋 「それでは今回の謝辞を」

ジエナス 「はい、暇人さん、早速感想を書いていただきありがとうございました」

百秋 「それではまた次回をお楽しみに!!」

第二話（前書き）

今回は篠ノ之姉妹との出会いです。

第二話

俺達は小学生に千冬姉も高校生になった

そして俺達は今日1人の女の子と一緒に帰っている。

「えっと今日はありがとう、感謝する」

「別に良いよ俺が気に食わなかっただけだし」

「同じくそれにああ言う奴をぶっ飛ばすのが俺の趣味だし」

上から順に一緒に帰っている篠ノ之箒、一夏、俺の順番だ。そう原作にあったあのエピソードが今日あったわけだ。

大体何があったかを言うとある男子が箒を男女という

箒はそれを見無視

それを見ていた一夏がその男子を注意

その男子が逆ギレ

それを俺と一夏で撃破

そのお礼を言いたいと篠ノ之家に招待され一緒に帰ることになる
今こじ

「いや、百秋、人をぶっ飛ばすのが趣味なのは如何かと思うぞ」

「一夏、勘違いをしないでくれ俺は人をぶっ飛ばすのが趣味な訳じゃない、ああ言う自分の事しか考えていない奴をぶっ飛ばして俺にひれ伏すのを見るのが好きなのだ
それに今日は珍しく一夏もぶっ飛ばしてたじゃないか」

ちなみに今の一夏は多分小学生の平均的な体力と比べると明らかに
おかしいほどの体力を持っている。もちろん俺もだけど多分ほぼ
毎日のように俺と一緒に遊んでいるからだろう。暮らしの中に修行
ありっつね。

「う、さすがに今日のアイツはムカついたからな」

「それでも嬉しかったぞ」

その後も俺達は特徴のある先生や同級生の話をしながら篠ノ之邸
に向かった。

「ん？ 一夏と百秋じゃないかどうしたんだ？」

「あー筈ちゃんだ！ おつかえり〜」

俺達が篠ノ之邸に付くとそこには今日は定期テストだったのか早
めに帰ってきたであろう天才2人がいた。

「あれ？ 千冬姉はどうして此処に？ それとその人は」

一夏が千冬姉にどうして此処にいるのかをそして一緒に居る女性
は誰かなのかを聞くとその女性がすごいプレッシャーをかけてきた。

「君達さあ、ちーちゃんと箒ちゃんのいったい何？」

そのプレッシャーを感じ取ると俺は一夏を庇うように前にでて同
じようなプレッシャーを放とうとしたが

ゴツ

千冬姉の拳骨が女性の脳天に直撃した。

「2人は私の弟で後ろにいるのが一夏で前にいるのが百秋だ」

「へえ〜そうなんだ。でどうして箒ちゃんと一緒に居るのかな？」

「そ、それはこの2人が私が虐めてたのを助けてくれたんだ、それ
でそのお礼をしようと思って」

「へえ〜そいつの名前は？」

箒が何故今日俺達を連れてきたのかを話すとその女性が先ほど以
上のプレッシャーを放ちながら箒に聞いてきたが

「ちよつとまで束、少し百秋たちに話がある」

千冬姉がそう言ったとたん一夏は逃げ出したがすぐに捕まった。

俺？ 俺はもう諦めてるよ。それに自分でやった事は責任をとらな

いとね。

「また、やったんだな。しかも今回は一夏もだな」

「はい」

俺達は道路の上でしかも人様の家の前で正座をさせられた。それを見た女性は笑いながら自己紹介をした。

「ハハハ、面白いね。君達、うん、興味を持ったよ。私は篠ノ之束ちーちゃんの親友で世界最高の天才だよ！ よろしくねいっくん、はっくん」

こうして俺はIS開発者篠ノ之束と出会った。

第二話（後書き）

ジエナス 「今回の後書き座談会のゲストは」

箒 「篠ノ之箒だ」

ジエナス 「一夏君に惚れた箒さんです」

箒 「べ、別にほれてなどおらぬ！」

ジエナス 「ここに一夏の幼稚園時代の写真があるけど」

チャキ

箒 「YOKOSE」

ジエナス 「はい、だから刀出さないで。では今回一夏君に助けられた感想は？」

箒 「か、かつこよかった……って何を言わせるのだ！」

ジエナス 「素直でいいね。さて次回は千冬姉と百秋の話になります。ただしかなり千冬姉のキャラが壊れます」

箒&ジエナス

「「次回をお楽しみに！！」」

第三話（前書き）

千冬姉が千冬姉じゃない。

どうしてこうなった。

第三話

篤たちと知り合って数ヶ月後の週末俺は朝食を作っていた。すると千冬姉が起きてきた。ちなみに一夏は友達の家泊まりに行っている

本当は今日のお昼には帰ってくる予定だけど昨日からの雨が酷くなりさっき電話があつて明日まで帰ってこないみたいだ。

「千冬姉、おはよう。ってどうしたの!? 顔真っ赤だよ?」

「おはよう、百秋。大丈夫だ、薬を飲んで寝れば治るさ」

起きてきた千冬姉は明らかに風邪をひいているみたいだった。

「直ぐにおかゆ作るから着替えて部屋で寝ていて、そんなに汗をかいた服じゃもつと悪くなるからね」

「あ、ああ。そうする」

「うん、お大事にね」

千冬姉はなるべく気丈に振舞っていたけど多分無理をしてるんだろ。なるべく早く作ってあげよう。

おかゆを作り俺は千冬姉の部屋に向かった。

コンコン

「百秋だけど千冬姉起きてる？」

「あ、ああ」

声だけを聞くとさっきよりはちょっと楽になったみたいだった。

「一応おかゆと薬を持ってきたけれど食べれる？」

おかゆをベッドの脇に置き俺は千冬姉のパジャマを畳みながら訊いた。

「だ、大丈夫だ」

だがそうだった千冬姉はベッドから落ちそうになっていた。

「危ない！」

俺はなんとか千冬姉を抱きとめる事が出来た。

「何処が大丈夫なの？ 全然大丈夫じゃないじゃん！」

千冬姉を何とか壁にもたれさせるようにベッドに座らせると薬と一緒に持ってきた体温計を取り出して熱を計ることにした。

「ごめん、千冬姉、少しボタンを外すよ」

暫くたち体温計が鳴ったので確認した。

「39度8分か、これは今日1日寝てないといけないね」

「わ、私は大丈夫だ」

「ダメ、この雨じゃあ病院にも行けないんだから今日は寝てないとはい、おかゆ食べさせてあげるから。あ〜ん」

「じ、自分で食べられる」／／／

千冬姉はさらに顔を紅くして拒むけど病人に無理はさせられない。

「顔を真っ赤にしてるくせにそんな事言わないの。ほら、口をあけて」

「こ、これはそう意味じゃなくて」

「病人が顔を真っ赤にさせてるのに他の意味はないでしょ！それにさつきベッドから落ちそうになったのは何処の誰？」

「う、分かった。あ、あ〜ん」／／／

千冬姉になんとかおかゆを食べさせてあげる事ができたので薬を飲ませて千冬姉が寝たのを確認すると俺は千冬姉のパジャマを持って部屋をでた。

千冬姉のパジャマを洗濯機にかけると俺は筭の家に電話をかけた。

「もしもし、篠ノ之さんのお宅ですか？ 百秋です」

『百秋君か、どうしたんだい？』

電話に出たのは柳韻さんだった。

「いえ、千冬姉が風邪をひいたので今日の特別稽古はなしという
ことにしたいんですが」

『そうか、千冬君がか。珍しい事もあるんだな。分かった、今日明
日の特別稽古はなしにしよう』

「すみません」

『いやいや、心配する事はないよ。それより僕がそっちに行こうか
？』

「大丈夫です。それにもし柳韻さんがこっちに来たら。東さんが来
て千冬姉が休めなくなるので」

『否定できないのが痛いな。それじゃあお大事にな』

「すみません。それでは」

俺は電話を切ると自分の朝食を食べ始めた。一夏に連絡すると絶
対この雨でも帰ってこようとするから連絡はしない。

暫くたち、お昼の時間になりもう一度おかゆ（朝とは違ってちゃんと出汁を取って焼き鮭をほぐした物を入れたもの）を作って千冬姉の部屋に向かった。

「千冬姉お昼ご飯を作ったけど食べられる？」

「ああ、朝より楽にはなったからな筋肉痛も軽くなった」

「よかった。それじゃあここにおかゆ置いておくから無理せずに食べてね。あと薬もここに置いておくから」

「ああ、すまないな」

そして俺はリビングに戻りよしとを見終わると再び千冬姉の部屋に鍋を取りにいった。

コンコン

「千冬姉、入るよ」

返事がなかったが状況が状況なので俺は部屋に入った。

「やっぱり寝てたか」

俺は千冬姉の頭を撫でながらベッドの横に座った。

「千冬姉、いつも俺達のために無理をしてくれてありがとう。もし千冬姉に何かあたら俺が守る。だから今日はゆっくり休んでくれ」

俺はもう大切な物を失うのは嫌だから。俺は心の中でそうつぶやくと鍋をもって千冬姉の部屋を出た。

百秋 Side out

千冬 Side

私は百秋が作ってくれた鮭粥を食べながら自分の気持ちについて考えていた。

「私は百秋にどんな感情を持っているんだろうか。最初は私達と同じ様な境遇に同情を覚えたのは間違えない。」

だが今日まで一緒に過ごしてきたいつも一夏もそうだが百秋はそれ以上に私の事を考えてくれている。私が束が開発しているあれの影響で帰るのが遅くなってもちゃんと起きて

夕食を作ってくれている。本当に私は百秋に対してどんな感情を持っているのだ？ 弟？ それとも1人の異性としてか？」

そんな事を考えていたが私は自嘲的な笑みを浮かべた。

「何を言っているんだ私は。百秋は小学生だぞ。なんでそんなことを考えているんだ。だが百秋が他の女子と話しているとイライラするし、」

今朝もあのあと寝たフリをしていたがなかなか寝付けなかった。なんで小学生のあ〜んでドキドキしなければいけないんだ。確かに百秋は同年代の子ども達と比べると遥かに精神年齢が高い。

「というより私や束と同じくらいではないのか？ と思う時がある。はあ、私はホントに百秋にどんな感情をむけているんだ」

コンコン

「千冬姉、入るよ」

百秋について考えていると当の本人が入ってきた。

「やっぱり寝てたか」

「何故私は寝たフリをしているんだ？ 普通に返事をすれば良いだけだろう」

すると百秋は私の頭を撫でながら横に座った。

「い、いったい何を？ それでもなんでだろうと凄く落ち着く。ほんとに百秋は小学生なんだろうか」

私がそんな事を考えていると百秋はいつもとは全く違う雰囲気をつぶやいた。

「千冬姉、いつも俺達のために無理をしてくれてありがとう。もし千冬姉に何かあたら俺が守る。だから今日はゆっくり休んでくれ」

このつぶやきを聞いて私は自分の気持ちがハッキリと分かった。

「へそつか、私は百秋が好きなのか。小学生だなんて関係ない。私は百秋が大好きなんだ。それだけは変わらない」

私は自分の気持ちがハッキリした途端睡魔に襲われそのまま意識を手放した。

第三話（後書き）

ジェナス「第3回ゲスト座談会のお相手は」

千冬「織斑千冬だ」

ジェナス「今回百秋に惚れた千冬姉です」

千冬「なあ、作者」

ジェナス「ん？ 何？」

千冬「私はここで何処まで話していいんだ？ 特に百秋の正体について」

ジェナス「別に特に制限はないよ此処は本編とは関係ない世界だから」

千冬「そうか、それでは1つ質問を良いか？」

ジェナス「うん、何？」

千冬「私の性格が違いすぎるような気がするのだが、それと流石に小学生に恋するのはちょっと難しいじゃないか？」

ジェナス「うん、性格については本当にごめんなさい。えっと後者については百秋の自身は千冬姉や東さんよりも年上だからね。だから精神的には問題ない。それに恋愛に歳の差なんて関係ない」

千冬「う、たしかにそうだが。良いのか？ 感想でほろくそに言われないか？」

ジエナス「多分来るだろうね。性格改変が中途半端だし。それが目茶苦茶怖い」

千冬「そこは作者の文才のなさが原因だな」

ジエナス「はい、その通りです。それでは次回予告をお願いします」

千冬「ああ、今回は束との話らしい。まさかと思うが」

ジエナス「うん、多分千冬姉の思ってる通りだよ。というよりも既に作品情報には書いてあるからね」

千冬「はあ、ライバルが増えるのか」

第四話（前書き）

今回は東さんとの話です。

第四話

今日俺達の家には珍しく束さんが来ていた。そして一緒にいまりピングで束さんが作ったゲームをやっている。

「あーまた負けた。なんではつくんには勝てないんだろう?」

「そう言っておきながら毎回ゲームのOSを書き換えなさいください」

「ウツ、気づいてたんだ。ってちーちゃん竹刀は人に向けちゃいけないものなんだよ!」

俺がOSについて指摘すると千冬姉はどこから出してきたのか分からないが竹刀を束さんに向けて振り下ろした。

「なあ、百秋。千冬姉止めなくてもいいのか?」

「いいんだよ。自業自得だ」

「ちょ、ちーちゃん、これ以上やったら新しい境地に逝っちゃうから止めてー」

「勝手に逝ってる。そして戻ってくるな」

あっちでは色々とやってるみたいだが無視して俺と一夏は箒に話

しかけた。

「箒、どうしたんだ？」

「いや、なんでもない」

「東さんがいるからか？」

俺がストレートに訊いてみると凶星だったのか首を縦に振った。

「東さんも箒を楽しませようとしてるんだから楽しもうぜ」

「そ、それは分かっているのだが。」

やっぱり箒は東さんにコンプレックスを持っているみたいだ。

「なら、今度話し合ってみるんだな。そうすれば何かわかるだろう」

「そうだろうか？」

「それは箒次第だけだな」

「ちょ、あつダメっ逝くこのままじゃ逝っちゃっ」

はあ、もうそろそろ止めないとこの作品がR - 18指定になっちゃうから止めるか。

「メタ発言はやめろ」

ん？ 何か電波を感じたが気のせいだろう。

「千冬姉そこまでにしてあげて。本当に危なくなってるからいろいろの意味で」

「確かになここには小学生がいるんだつたな」

「ありがとうはっくん。でもちょっとその色々な意味の中の1つを訊いてみたいな」

「東さんは綺麗なんだからさつきみたいな事は言っではいけないとだけ言っておきます」

「ひき、綺麗だなんて。初めて言われたよ」

ほんとにゆ りんボイスでそんな事言われたら東さんの容姿も相まって色々と危なくなる。ん？ なんだ？ 後ろから凄い黒いオーラを感じるんだが。

「ほう、百秋は東のような奴が好みなんだな。よく分かったぞ。」

「ちよ、なんでそんな事になってんの。というよりこれ以上やったら一夏と箒には見せられないような状況になっちゃうよ」

「大丈夫だ。あいつ等は他の部屋に行った」

そこで俺が確認すると確かに一夏と箒の姿はこの部屋にはなかった。

「ちよ、まだ俺小学生」

「問答無用だ」へ私には綺麗だって1回も言ってくれなかったくせに」

「不幸だーーーーー」

俺はその後の記憶がない。気づいたら俺の部屋で頭に包帯を巻かれて東さんに膝枕されていた。

え？　なんで東さんが俺を膝枕してるの？

「あ、はっくん起きたんだ」

東さんは俺に声をかけてくれたが東さんの女性の象徴しか見えなかった。

「はっくんはいったい何処を見てるのかな？」

「小学生に聞きますかそれ？」

「だってはっくん、小学生には思えないもん」

俺はなんとか上体を起こしまだ少し痛む頭に手を当てながら質問をした。

「えっと、千冬姉は？」

「あのあといっくんがきて今リビングで篝ちゃんといっくんに説教されてるよ」

「そ、そうですか」

「そ、それでさ、さっき言ってた事って本音かな？」

「さっき言ってた事って？」

「そ、そのき、綺麗だった」

ああ、あの時ね。

「うん、本音だよ。第一俺はプライベートで社交辞令を言うほど人間出来てないし」

俺がそう言つと東さんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。怒らせちゃったかな？

「そ、そうなんだ。それじゃあもし私に何かあったら守ってくれちゃったりしてくれるのかな？」

「ああ、俺が守る．．．．．まあ、俺に出来る事ってたかが知れてるんだけどね」

これは俺の本音だ原作では東さんは特に天才であるが故に孤独の中で生きてきたと俺は思っている。なら俺が守ってやればいいんだ俺が出来る事で。

「そ、そうなんだ。それじゃあさコレを見てくれる？」

そういうと束さんはペンの様な物を取り出した。そしてそれは超小型端末だった。そしてそこにはアレが表示されていた。

「これは？」

「私が今作ってるマルチパスワードスーツだよ」

「なんで俺にコレを？」

「何でだろうね。私にも分からないよ。でもねはっくんになら見せても良いかなって思ってたね。それにねこの子の名前を決めてあげて欲しいんだ」

「いいの？」

「うん、お願い」

「それならISSインヌエスってどう？」

一瞬別の名前にしようかと思ったけどやっぱりこの名前がいいと思っ。

「無限の成層圏って意味だね。うんこの子も喜ぶと思うよ」

「どういたしまして。時間が時間だからこれから夕食を作るけど食べてく？」

「はっくんの手作り？」

「千冬姉に料理が出来ると思う?。」

「アハハ、それもそうだね。私はもう暫くここに居るから出来たら呼んでね」

「別にいいけど何も無いよ?。」

「うん、でもここにいたいんだ」

「了解、出来たら呼ぶね」

そういつて俺はキッチンに向かった。

百秋Side out

東Side

はつくくんが部屋を出て行って1人になると心臓の鼓動が早くなつた。多分今の私の顔は真っ赤だろう。

「本当になんで私ははつくんにこの子を見せたんだろう? まだ篤ちゃんやいつくんと変わらない小学生なのに。」

最初はそのちーちゃんが私以外で素で話しているのを見て興味を持つただけなのに」

私ははつくくんのベッドに倒れこんだ。

「でも1人ではいるときにはつくくに話しかけられると何故か落ち着くんだよね。ホントにはつくくんって小学生なのかな?」

ちーちゃんも多分はっくんに惚れてるんだろうな。私はどうなんだろう？？」

私は目を瞑ってさっきはっくんが私に言ってくれたことを思い出す。

「ああ、俺が守る．．．．．まあ、俺に出来る事ってたかが知れてるんだけどね」

「あの時のはっくんは私達と同じ年かと思うくらいすごく大人びていた。そしてかっこよかった」

その考えが出てきた時漸く私は自分の気持ちを理解できた。

「私ははっくんが好きなんだ。だから私にとっての子どもの様なこ
の子をはっくんに見せたんだ。
ライバル
恋敵はちーちゃんか、負けないよ。でもそれにしても小学生のはっ
くんに惚れちゃうなんてね。天才の私にも予想できなかったよ」

私は連日の徹夜が祟ったのかはっくんが呼びに来るまで眠ってしまった。

その後ちーちゃんにはっくんのベッドで寝てたのがバレて竹刀で殴られたのは痛かったな。

第四話（後書き）

ジエナス「第4回ゲスト座談会のお相手は」

束「もすもす？ 終日^{ひねせす}？ みんなのアイドル篠ノ之束だよ」

ジエナス「今回自分の気持ちに気づいてどうでした？」

束「うん、不思議な感じかな？ 今まで恋なんてした事はなかったし」

ジエナス「それでは今後ライバルが増える件についてはどうお考えで？」

束「うん、確か後4人増えるんだっけ？ はっくんも罪作りな子だよ

まあ、負けるつもりはないかな？」

ジエナス「そうですね。それでは今回の謝辞を、神楽要さん感想を書いていただき

ありがとうございます」

束「それに最悪の場合はアレを発動すればいいだけだしね」

ジエナス「アハハハ、お手柔らかに、それじゃあ次回予告をお願いします」

束「えっと確か白騎士事件の直後の話だって、それとはっくんの能力の一旦が見れるらしいよ」

「ジェナス「それではまた次回お会いしましょう」

第五話（前書き）

一応受験に一区切り付きましたので投稿します。

第五話

俺は今筭の家にある道場で柳韻さんと特別稽古をしていた。

「ふう、ホント百秋君は強いな千冬よりも強いんじゃないかな？」

「そうですね？ まあ、道では仕方ないんですが術ではたとえ千冬姉や柳韻さんでも負けるつもりはないですよ。ま、今回も俺が負けちゃいましたけどね」

今俺は筭の父の柳韻さんと木刀を使った限りなく実戦に近い試合いをしていた。勝敗は俺の惜敗だった。

「そうか、だが千冬君には術の事は言わないのか？」

「まだですよ。これは篠ノ之流ではなく俺の魂が覚えていた神威流ですから、ま、いつかは話しますけどね」

俺は剣道をやる時は千冬姉や一夏たちと一緒に指導を受けているが、俺が前世で使っていた神威流の剣術の稽古をする時は柳韻さんに稽古をつけてもらっている。

最初にお願ひした時は竹刀を持ったときに20代ぐらいの俺と思われる人間が見覚えのない道場で木刀を振る映像が俺の頭の中に流れてきたと話した。そして、その話を聞いた時柳韻さんはそれはもしかしたら前世の記憶かもねと言っていた。

あっさり真実を見抜かれて俺は何もいえなかった。もちろんさつきの話の通りに千冬姉はもちろん筭にも秘密だ。だが、昔俺と柳韻さんがたつた一度だけ死合いをしたときにたまたま一夏が忘れ物を取りに来たときに見られているので

柳韻さんに話した事と同じ説明をしてその後千冬姉や箒に心配をかけたくないから黙っていてくれとお願いして黙っていてもらっている。

「そういえば、学校では昨日の事何か言っていたか？」

「ええ、今日の話はそれだけで1日の授業が潰れてしまいましたよ」

「そうか、それはすまないことをしたな」

そう、つい昨日日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射された、しかし白騎士と言う兵器がそれを撃墜、しかもそれを見た各国が

白騎士を捕獲もしくは撃破しようと送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半をしる騎士は死亡者を出さずに撃墜した。原作にあった白騎士事件が起こったのだ。

「いえいえ、柳韻さんは何も悪くないですよ悪乗りした東さんとそれに乗った千冬姉が悪いんですから、それよりこれからどうするんですか？」

「ああ、今は知り合いに頼んで報道や各国政府はこの家には来ていないがこうも世界を変えてしまうようなことをしてしまっただけは多分政府の重要人物保護プログラムを受ける事になるだろうな」

「しかも家族はバラバラになるでしょうね、東さんも多分来週には姿を眩ますでしょうし」

「ああ、東は多分大丈夫だろうが箒がな」

「ええ、家族だけではなく初恋の相手とも離れ離れになってしましますからね」

「そうだろうな、それといい加減一夏君は箒の気持ちには気づいたのか？」

「まだです。アイツが鈍感のせいで俺がどれだけ学校で恋愛相談されるか最近では若い先生や周りが次々に結婚してあせっている先生にまで相談される始末ですよ。最近アイツをぶっ飛ばしたくなりますよ」

「ハハハ、それは君の精神年齢が小学生とは思えないからじゃないかな？ 千冬君も最近君が甘えてくれないって相談に来るくらいだからね」

「うーん、心配をかけなさ過ぎるってのもいけないんですかね？」

「そこは人それぞれだよ。それより君も気が付いてると思うが一夏君は」

「ええ、最近俺や柳韻さんの稽古を覗いていますね、しかも俺の動きを見よう見真似で剣道の動きに取り入れてますね」

「どうする？ このままでは何かのきっかけで力に取り付かれるぞ。束と出会った頃の千冬君の様にな」

「そうでしょうね、だから俺が本当の神威流の技と術を教えますよ。来年からは多分千冬姉もIS関係で忙しくなって家にはあまり帰ってこないでしょうから」

「そうか、それじゃあここの道場の鍵は君に渡しておくよ。さすがに公園で稽古をするわけにはいかないだろう?」

「はい、ありがとうございます。それと今東さん部屋にいますか?」

「ああ、たぶんな、もしいなかったら多分あそこだな入り方は流石に僕も分からないがたぶんそこで白騎士も作ったのだろうな。あ! それと僕が気づいていた事は」

「秘密にしてくれ、でしょ。俺も柳韻さんには神威流の事を黙ってもらっていますから」

「頼む、それにしても君は本当に小学生か? 某名探偵みたいに高校生から小学生になったって言われたほうがじっくりくるぞ」

「ハハハ、似たような物じゃないんですか一部とはいえ前世の記憶があるくらいですから」

実質中身三十路超えてるおっさんだよな今の俺って。

「それではありがとうございます」

俺は柳韻さんにお礼を言つと東さんの部屋に向かった。

コンコン

「東さんいますか?」

俺は東さんの部屋の前につくとノックをして声をかけた。すると

すごいスピードでドアが開き俺は高校生とは思えない母性の塊に顔を埋め込まれた。

「はっくん！ 会いたかったよ」

うん、本当にこの人高校生か？ こんなけしからん物を持って、まあ千冬姉もご立派な物をお持ちになっていますが。たまに朝息苦しくて目を覚ますと千冬姉に抱きしめられてる事がある。そんなことを思っていると

「うー、はっくん、他の女の事を考えてるなっくんちーちゃんの事かな？ それで今日はどうしたの？」

この人は人の頭の中も覗き込む事が出来るのではないだろうか。

「えっと、前に渡してもらったPCを渡そうと思って」

「ん〜アレははっくんにあげた物なんだよ。別にはっくんが持っけていても良いんだよ」

「いえ、それなら返すと素直に言います」

そういつと束さんの顔が変わった。

「誰にも付けられてないよね」

「俺がそんなへマするとお思いで？ それで千冬姉は？」

「大丈夫だよ〜ならラボにいつてみよう！」

そういつて俺達は白騎士を作ったラボに向かった。ちなみに千冬姉は白騎士は束さんが1人で作ったと思ってるがOSなどのソフト面は俺が殆ど作った。ISという名前をつけてから束さんが俺に開発を手伝ってくれと言って来たので

千冬姉や世間には秘密にすることとを条件に俺もISの開発に加わる事になったのが原因だ。やっぱ束さんが遊ぶたびにゲームのOSを書き換えてるのを指摘したのが開発に参加してくれって言うてきた原因なんだろうな。

まあ、その時に超高性能のノートPCを貰えたのでISのコアの機能を組み込んだIS用のGNドライブやツインドライブシステム、さらにはVPS^{仮想現実}装甲のデータを作る事が出来た。

そして俺専用のISのデータを作り今日束さんに渡しにきたという訳だ。

「うーんコレはすごいね意思を繋ぐ素粒子を作り出す半永久機関にそれを使ったビーム兵器、更に殆どの実体兵器を無力化する装甲しかもこのデータを見るとその装甲はシャトルの様な形じゃなくても大気圏突入に耐えられるなんて

さっすがはつくん。ヨッ、クリエイターオーバーテクノロジー」

「それを言うなら束さんもでしょ」

「それもそうだけどはつくん程じゃないよ」

「はあ、それで率直に聞きます、コレ作れますか？」

「いつまでに？」

「そうですね、俺達が高校に入学するまでに」

「余裕だよ。それとこの子の名前は？」

「たけはづち
武刃槌」

「うん、それじゃあいつくんとちーちゃんをよろしくね。あとコレは私が貰う事になるから新しいのをあげるね」

「はい、それでは武刃槌をよろしくお願いします」

そういつと俺はラボを出た。ラボを出る直前に千冬姉の気配を感じたのでちょっと神威流の術を使ってバレないように家に帰った。

そして俺が家に帰ると一夏が庭で竹刀で素振りをしていた。一夏の素振りを型を見て直ぐに木刀を取り出し一夏の竹刀を弾いた。

「つつ、行き成り何するんだよ。百秋」

「一夏、さっきのは何のつもりだ」

俺はこつちの世界に来て1度も放ったことのない本気の殺気を1番向けたくない家族に向けながら一夏に質問をした。

「つつ、百秋の真似だよ。俺も百秋みたいに強くなりたいんだ。千

冬姉や百秋に守られてるだけなのは嫌なんだよ！俺も大切な人を守りたい！」

一夏がそう言った時俺は本当に心の底から安心した。一夏はただ力を求めたのではなく守るために力を求めたからだ。

「そうか、なら一夏1つ聞くが一夏はもし大切な人を守るために誰かにとって大切な人を斬らなきゃいけない時がきたらその人を斬り、自分も同じことをされる覚悟はあるか？」

決して小学生に聞くような内容の質問ではないが今後の事を考えてあえてこの質問を一夏にぶつけた。

「わからない。俺はそういう場面はテレビとかでしか見たことがないからわからない。けど、俺も大切な人を守りたい！コレだけは絶対に嘘じゃない！」

俺が出す殺気に怯えながらも俺の目を真っ直ぐに見てそう答えた。

「わかった。流石に俺もこの剣術、神威流って言うんだけどな、これの事を全て思い出したって訳じゃないから全てを教えられるわけじゃないけど出来るだけ一夏に技も術も教えるよ」

正直ここであるといったら技しか教えず、ないといったら基本の型と術しか教えないつもりだった。

「本当か！ やったぜ」ただし3つだけ条件がある「なんだ？」

「1つ、千冬姉や篤には俺が神威流のことを話すまで黙っている事、1つ、むやみやたらに神威流を他人に見せない事、1つ、剣道の試

合では神威流を使わない事、守れるな？」

「ああ、絶対に守る」

「そうか、それなら明日から箒の家で稽古だな一応鍵は貰ってるからいつでも来て良いって柳韻さんも言ってたしな」

「そうなんだ。それじゃあもうすぐ千冬姉も帰ってくるだろうから早くご飯作ろっぜ」

「ああ、そうだな」

そう言うつと俺達は家の中に入って行った。そして束さんは翌日に俺に新しいPCをくれたさらにその一週間後束さんは行方不明になるのとはほぼ同時に国際指名手配になり残りの篠ノ之家に皆は重要人物保護プログラムによってそれぞれバラバラに日本各地を放浪する事になった。

第五話（後書き）

ジエナス「お久しぶりです。では早速今回のゲストを紹介しましょう」

百秋「早くも二度目の登場織斑百秋です。そういえば受験の結果は？」

ジエナス「まだ、届いてないよ。届き次第活動報告で連絡するよ」

百秋「そうか、それで今回は箒と東さんのお父さんの柳韻さんが出てたな」

ジエナス「原作であまり出てこないキャラだったから案外書きやすかったかよ。」

それと、例の暗部を少しだけ匂わせたのですが分かった人いますか？ どうも私は伏線という物を張るのは苦手で」

百秋「相変わらず文才が無いな」

ジエナス「アハハ、自分のキャラに言われるこの始末」

百秋「ソレより早く今回の謝辞をしるよ」

ジエナス「はい、それでは、紫苑さん、ゼロさん、八神 未来さん感想ありがとうございます。返信出来なくてすみません。今回からの感想には出来るだけ早く返信させていただきます。それじゃあ百秋、次回予告を」

百秋「今回はドイツでの話だそうだ。と言う事はアレか？」

ジエナス「うん、アレ、それと一夏と君の強さが初お披露目だね」

百秋「そうか、それじゃあまた次回をお楽しみに」

ジエナス「革新の扉、斬り開け！！」

百秋「何、それ？」

ジエナス「いやさ、種とかで次回予告の後に言ってるじゃんミサトさんが」

百秋「あれ、マリユー艦長だからね、間違えないで」

ジエナス「それではこれで今回はお暇させていただきます」

第六話（前書き）

かなり久しぶりに連日更新です。

第六話

東さんに武刃槌の製作を依頼してから数年がたち今俺達はドイツにいる。第二回モンド・グロツソに出る千冬姉の応援に来ている。

そうあの事件が起こる日だ今日は朝起きてからずっとこのホテルを囲うように傭兵のような雰囲気を持つ人達がいる。俺は一夏に気づかれないようにそいつらの気配を消している。

なるべく原作開始までに原作ブレイクをしたくないからだ。

「ああ、わかってるよ。本場のバームクーヘンを買ってこればいいんだろ？」

そして俺達はいまホテルでくつろいでいるが一夏は日本にいる俺たちの友達である凰鈴音と五反田弾の2人と電話をしていた。もちろん一夏の恋愛原子核は順調に鈴も虜にした。

まあ、大体は筈のときと同じだ。

「一夏、鈴と弾は元気そうだったか？」

「ああ、いつもどおりだったぜ」

「さてと、もうそろそろ決勝戦の時間だ、行こうか」

そして俺達はホテルを出た。そして迎えの車に乗り暫くするうちに眠らされた。

そして気が付くと何処かの倉庫の中の柱に俺達はロープで縛り付けられていた。

「百秋、お前気づいていただけろ？」

「バレたか？ まあ、腕試しだと思ってくれ。それにさっさと片付ければ千冬姉にも迷惑はかからないだろう」

一夏も俺とほぼ同時に目を覚ましたようで行き成り確信を付いてきた。

「おい！ 何を喋っている！ テメエら自分の立場わかってるんだろっな？」

俺達が小声で話していると日本語が分かるのか、銃を構えた男が叫んできた。

「はいはい、分かっていますよ。俺達は人質です」

「テメエ、ふざけてんのか？」

「ふざけてませんよ、時間稼ぎです」

「アア、テメエやっぱ腕の1本いっとくか？」

「えーっと、その言葉そっくりそのまま返すぜ」

「テメエ、sギヤアアアア」

男が俺に銃を向けた瞬間男の右腕の肘の稼働域が180度ぐらい

になった。

「さっすが一夏何も言わずにくオペレーション俺が時間を稼ぐから敵を倒せ>を完遂してくれたね」

俺が縄を外しながらそう言うと一夏は呆れたように答えた。

「百秋って束さんに影響受けすぎじゃね？」

「いやいや、あの変態と一緒にしないでよ」

俺達が他愛のない事を話していると俺達の周りを囲む様にISを身に着けた人間が現れた。

「だから、男なんかに見張りをさせるなって言ったのよ」

「いいじゃないこういうふうにイキがってる男をいたぶれるんだから」

ISを身につけた人たちはそんなことを言っていたが最後の台詞を聞いた瞬間俺達の中で何か切れた。そして俺は自分達の枷を外す台図を一夏に送った。

「おい、あんたら戦場にいるんだったら気を抜くなよ」

一夏がそんなことを言うところある女性がキレた。

「アア？ 男の癖にイキがってるんじゃないよ」

「はあ、なあお前達に俺たちの姿を認識できるか？」

「はあ？ お前何言って、って消えただと！ いったいどこに？」

俺がそう言うのと俺と一夏は神威流の術を使った。そして、まず近接ブレードをもった2人をそれぞれ1人ずつ倒し次々にISを装着した人間を倒して行った。

そしてとうとうリーダー1人となった。

「いったい何が！ ISを装着しているのになぜ！」

「ISを装着してるからだよ。少しくらい日本の武術ぐらい勉強しろよ」

「テメエらいったいどこにいやがる！ 出て来い！ 卑怯者！」

「はあ、生身の人間に対してISを持ち出すような奴には言われたくないね。それと俺達はお前の目の前にいるぞ。ちなみに俺達は今使っているのは神威流術ノ型壱式<明鏡止水>だ」

そう言うのと俺と一夏は術を解いた。リーダーから見れば行き成り目の前に現れた様だっただろう。そして俺達はソイツに同じ技を打ち込んだ。

「神威流功ノ型壱式<響>」

「ハイパーセンサーを切ってたのがお前の敗因だ」

多分、ハイパーセンサーを切っていなかったら一夏を守りながらの戦闘になっていたかもしれない。俺達を舐めててくれて助かった。そして、ソイツが倒れるのと同時に倉庫のドアがぶち抜かれそこ

にはISを装着した千冬姉が現れた。

百秋Side out

千冬Side

しまった！ 油断した。百秋と一夏が私の応援に来るといっならこうなる事を予想できたはずなのに！ただの誘拐犯なら私もここまです心配はしない、あの2人はそこらへんにいる様な犯罪者にやられるような奴じゃないからな、

まあその犯人には生きている事を後悔させるくらいの事はするが、だが今回は確実にISを装備した奴らが出てくるはずだ。もしそうになったらいくらあの2人でも殺されてしまう。もしそうになったら私は立ち直れない。

「ブリュンヒルデ、あなたの弟さん達はまとめて町外れの倉庫に監禁されているそうです」

「ありがとう、感謝する」

私はドイツの特殊部隊が集めた情報を受け取ると私の2代目の愛機<暮桜>を展開すると最高速度で百秋と一夏が監禁されている倉庫へ向かった。

ドイツ軍には借りを作り、モンド・グロツソ2連覇を逃す事になるがそんなことは如何でも良い二人とも無事でいてくれ。

時間にしてみれば5分もたっていないだろうが私にとっては永遠の様な時間で倉庫に到着した。そして直ぐにドアを吹き飛ばした私は自分の目を疑った。

なぜなら其処にはIS用の近接ブレードを生身でもった百秋と一夏そしてその周りで倒れているIS装着者達がいた。

千冬Side out

百秋Side

ドアを吹き飛ばした千冬姉はこの状況を見ると一瞬だけ呆けた様だがすぐにISを待機状態にすると俺達に抱きついてきた。

このとき俺はここで初めてこの事件を回避しなかった事を後悔した。

「お前達怪我はないか？」

「ないよ。それより決勝戦はどうしたんだよ千冬姉」

「そんなことよりお前達だ。百秋も大丈夫か？」

「う、うん、だ、大丈夫だよそれよりも」／／／

うん、俺達を心配して抱きついてくれるのは嬉しいんだが露出が激しく薄いISスーツを着た状態で抱きつかれるとどうしても当たってしまっただよねその母性の塊的なものが。

「うん？ どうかしたのか？」

そう言いながら千冬姉は更にきつく抱きついてきたしかも俺だけ

に、

「その当たってるんだよ」／／／

俺がそう言っていると千冬姉は少し顔を紅くしながら反論をしてきた。

「私達は姉弟なんだぞそのぐらい普通だろう」／／／

そう言いながら千冬姉はなんとか離してくれたが丁度千冬姉の死角からリーダーが銃を構えていた。

「千冬姉！ 伏せて！」

俺は千冬姉の肩を掴んで力任せに伏せさせた。そして一発の銃弾が俺の頭部を貫通した。

「「百秋！」」

千冬姉と一夏が俺の名前を呼び千冬姉は崩れ落ちたが撃たれた俺の体は蜃気楼のように消え去った。

「何！ いったいどこに！ ギャ」

リーダーは叫んだが直ぐに気絶した。

「神威流術ノ型式式<鏡花水月>」

そして俺はリーダーの後ろにさっき俺が消えた時の映像を逆再生したように現れた。ただ唯一違うのは俺が撃たれていないということだ。

「ふう、百秋、それを使うんだったら先に言えよ。心臓が止まるかと思ったぜ」

「しかたないだろ、時間がなかったんだから。さてとあそこで崩れ落ちてる我が愛しきお姉さまを起こしますか」

そして、俺が千冬姉を起こそうとすると行き成り千冬姉が暮桜を展開させ俺に切りかかってきた。

「ちよっ千冬姉何してんの？俺だ百秋だって」

「貴様が百秋をよくも！」

そしてよく見ると千冬姉の目から光が消え周りが見えていないようだった。

「百秋！ どうする！」

「ちっ、しかたねえ、一夏此处で見た事は忘れるよ」

「え？ あ、ああ了解した」

そう言つと俺は再び鏡花水月を使って千冬姉に近づきそのまま自分の唇を千冬姉の唇に当てた。

「な！ 百秋！ 何して」

俺が唇を離すと千冬姉の目に光が戻り何とか正気に戻ったようだった。

「大丈夫？ 千冬姉？」

「あ、ああ、私はいつたい？ それより百秋は大丈夫なのか？」

正氣に戻った千冬姉は俺の脈を取ったり怪我がないか調べ始めた。

「大丈夫、大丈夫だから、ね、安心して千冬姉」

俺は何とか千冬姉をなだめた。

「えっと、千冬姉何があったか覚えてる？」

「お前が撃たれて気が付いたらお前の顔が目の前にあって・・・いつたい何があったんだ？」

「詳しくは後で話すけど俺が撃たれたと思って錯乱したのを俺が正氣に戻したんだ」

「そ、そうか。だがあの時確かにお前は撃たれたはずじゃ？」

「うん、それについてもちゃんと話すよ一夏と一緒にね」

「そうか」

千冬姉は納得がいかなそうだったが後でちゃんと話すと言ったら納得してくれたようで俺達から離れた所で此処の情報を提供してくれたであろうドイツ軍と連絡を取りはじめた。

「おい、百秋、お前思い切った事をしたな？」

「ああ、千冬姉を傷つけないようとしたらアレしか思いつかなかつた。頼むから忘れてくれ」

「ああ、俺もあんな千冬姉は思い出したくないからな忘れるとするよ。そんなことよりいい加減俺にも鏡花水月教えてくれよ」

「ああ、どうやら明鏡止水は完璧に出来てるみたいだから教えるよ。でもアレって教えて出来るような物じゃないんだけどね。」

まあ、明鏡止水を感覚で覚えたお前ならなんとかなるだろう」

そして俺達が話しているとドイツ軍の人たちがやってきてISを装着している奴らは千冬姉が自分で倒したと話、俺達は保護される事になった

俺達はその後事情聴取を受けドイツ軍が用意したホテルの一室で千冬姉を待っていた。

「なあ、百秋、話すのか？」

「ああ、もう既に千冬姉の前で術は使っちゃったし、これからの事を考えると千冬姉に心配かけないためにはいつでも力を使えるようにしておかないといけないからな」

「そうか、あ！ 鈴たちのお土産どうしよ？」

「まあ、明日軍の人たちに聴いてみよう」

そして俺達は弾達のお土産について話しているとドアがノックされ千冬姉が入ってきた。俺は室内にあった紅茶を千冬姉にだして正面に座った。

「千冬姉、正直に言うと俺の記憶はたった1つに関する事だけはずっと昔から思い出していたんだ。ちょっと特殊な記憶だけだね」

「どういうことだ？」

「うん、最初に思い出したのは千冬姉に連れられて初めて篁の家の道場で竹刀を握ったときなんだ。そのとき俺の頭の中に見覚えのない道場で20代後半の俺に似ている人間が

木刀を持ってさっき俺と一夏がしていた動きと同じ動きをしている映像が浮かんできてね、その事を柳韻さんに相談したら前世の記憶かもしれないって言ってそのまま稽古をつけてくれたんだ。

稽古といっても流石にあの動きは出来ないから俺の技や術を試す相手になってもらっていただけなんだけどね」

「そうか、前世の記憶が、どおりでお前が同年代の子ども達に比べて精神的に成長しているわけだな」

「こんな話信じるの？」

「信じるも何も実際目の前でお前達の動きを見ているし如何考えても百秋とであったときの年齢の事を考えると無理があるからなそれに私に黙っていたのも私に心配をかけたくなかったからだろう？ それとさっき言っている技とか術とやらは何なんだ？」

「うん、俺と一夏が使っているのは神威流っていつて神威流には技と術の2つがあるんだ。まず技だけどコレは篠ノ之流とかのほかの剣術と同じような居合いとか鎧通しのことを指す、そして術、コレが神威流の1番の特徴で自分の体を気で包んで相手から認識されないようにしたり、さっき俺が使ったように認識をずらしたり出来るんだ」

俺が1通り神威流について話すと千冬姉は俺が煎れた紅茶を1口飲んで続けた。

「そうか、その術とやらを使って私の目を盗んで修行をしていたのか」

「うん、まあ、最初のうちは俺が一夏の気を隠していたんだけどね。ちなみに箒達が引つ越した後にも道場に通えたのは神威流の稽古に使えって柳韻さんが俺に道場の鍵を渡してくれたんだ」

「そうだったのか、だが今度からは私にはなるべく隠し事はしないで欲しい。お前達がいなくなったら私は立ち直れなくなる」

「うん」

俺と一夏はそう返事すると千冬姉は部屋を出て行った。でもゴメン千冬姉俺が白騎士の開発に協力していた事まだは言えない。

そして翌日千冬姉から俺達の居場所を突き止めてくれたドイツ軍にお礼のために一年間の教導をする事になった事を話してくれた。

第六話（後書き）

ジエナス「はい、久しぶりに連日投稿ができて少しテンションがハイなジエナスです！ すみません。調子に乗りすぎました。さて第6回座談会のゲストは」

鈴「凰鈴音です」

ジエナス「今回、一瞬だけ出てきた凰鈴音さんです。さて、鈴さん今回一夏と百秋の戦いを見てどうだった？」

鈴「正直言って凄いわね、生身でISの近接ブレードを振り回すなんてどんな鍛錬をしたのよ。あと暮桜の攻撃を生身で避けるなんてどんな反射神経してるのよ」

ジエナス「まあ一応百秋もチート主人公だしね」

鈴「それとまさか百兄が千冬さんにキ、キスするなんて」

ジエナス「うん、百秋もあの時はパニックで何も考えずに行動したらああなたって、今カンペ出た」

鈴「それで百秋は千冬さんの気持ちに気づいてるの？」

ジエナス「そこは話が進むに連れて分かると思うよ」

鈴「そう、はあ、一夏は何時になったら私の気持ちに気づくんذار？」

ジェナス「とうぶん無理？」

鈴「はあ、憂鬱よ」

ジェナス「アハハ、がんばって。それでは次回予告よろしく」

鈴「ええ、次回は漸く原作突入よ。また暫く私の出番はないわね」

ジェナス&鈴「革新の扉、斬り開け！」

ジェナス「うん、やっぱりコレ使っでいこ」

第七話（前書き）

新年明けましておめでとございませう。今年も1年よろしくお願
いします。

第七話

ドイツでの事件から数年がたち、さらに原作どおり鈴が中国に帰ってから1年がたった。だが今はそんなことは如何でもいい

「これは、かなりきついな一夏」

「ああ、1日前の俺達に渾身の響をぶつけない」

俺達は今、周りからの異常な視線攻撃に耐えていた。そう今俺達はIS学園の入学式を終え、1年1組の教室にいる。

どうしてこうなったかと言うと俺と一夏は原作どおり藍越学園の受験会場に向かったがどつかの天災の所為で迷い、迷った先にあった受験用に置いてあったであろうISに触れてしまいそのまま起動させてしまい

そのまま保護と言う形でIS学園に入学が決まった。まあ俺は大体はこうなるのは分かっていたから心労的には一夏よりはましだったが。まあ、それだけならよかったのだがTVでの報道があつてから暫くはマスコミや各国大使館の人間にうちの国に来ないかと言われ、終いには解剖させてくれと自分の欲望に正直な某魔法少女アニメに出てきたマッドな科学者に似た奴も出てきた。

そういう奴は全力全壊でぶっ飛ばしたが、どこの世界にでもいるんだろうかああいう奴は。しかも俺達は前日までパラダイスに行けるんだと思っていた。俺達が視線攻撃に耐えていると漸く先生が入ってきた。

「皆さん入学おめでとございます。私はこのクラスの副担任の山田真耶です」

黒板の前まで来た女性教師ことこのクラスの副担任の山田真耶先生。正直言つて高校生が背伸びしたような印象だ。体の一部を除いてだが。

うん、実に立派な母性の象徴ですね。東さんクラスだな。

「それでは皆さん、1年間よろしく願いますね」

「.....」

山田先生の挨拶に帰ってきたのは沈黙だった。入学直後で皆緊張しているのかそれとも山田先生の容姿にビクリしているのか教室内は変な緊張感に包まれていた。

「そ、それじゃあ自己紹介から願いますね。えっと、出席番号順で願いますね」

山田先生は少し涙目になりながらそう言った。そして出席番号順に自己紹介が始まった。

そういえば東さんからこの間連絡があっただけど（東さんが行方不明になってからも俺と東さんは連絡を取り合ってる）俺の武刃槌にはリミッターをかけて普通のISと同じくらいのシールドエネルギーにするって言ってたっけ。

それとあの日（ドイツでの事件の翌日俺がやったことについて東さんが嫉妬して一騒動あった）から1度も武刃槌の事連絡来なかったけどまさか途中で開発止めてるって事はなよね。

一応あの人のモットウは完璧で十全だからな.....うん、大丈夫だろう。なぜだろう？ OSぐらいは自分でやれって言われそうだ。

「あ、あの織斑君？ 次はくお>で織斑君の番なんだけど大丈夫か

な？」

「え？ あ、はっはい大丈夫ですから泣かないでください！」

俺が考え事をしているといつの間にか一夏の番になっただけで俺と同じように考え事をしていたであろう一夏が山田先生を慰めている。

というより山田先生ってなんで教員免許取れたんだ？ まあ同じ疑問は千冬姉にもいえるけど。もしかしてIS学園の教師って普通の教員試験を受けないのか？
今度調べてみようかな？

「えっと織斑一夏です。これから一年間よろしくお願いします」

ワアオ、俺と一夏以外の生徒が全員の視線が一夏に突き刺さってるよ。というより一夏他に言う事はないのか？

「えっと、以上です」

ズゴォー

俺達以外のこの教室にいる人間が一斉にこけたよ。何？ 此処ってドリフの収録現場？ まさかのあの伝説の番組復活すんの？

「えっと、次も織斑君ですね。よろしくお願いします」

え？ 俺にこの空気をどうにかしろと？ どんだけハードルが高いんですか？

「織斑百秋です。最初に言っておく俺はk「何をやっている」「イツ

「テエエエエエ！ げ！ 愛s「誰が女化した三国志の英雄だ」

俺が某仮面ライダーの真似をやるうとしたら後ろから出席簿が飛んできた。でも俺は性格は似てるんだと思うんだけどね。

「織斑先生、主人公の決め台詞を邪魔してはいけないという暗黙のルールぐらい知ってるでしょ！」

「バスイイイイイン」

「誰が主人公だ。どうやら公私の切り替えは出来ている様だが私がいる前ではそのような事はさせんからな」

「何で千冬姉が此処に？」

「一夏、此処でソレを言うと」

「バスイイイイイン」

ほらなというよりなんで<シ>じゃなくて<スイ>なんだ？ 普通そんな音でないだろ。

「織斑先生だ。お前も百秋を見習え」

「お、織斑先生。もう、会議は終わられたんですか？」

「ああ、すまなかつたな山田君。クラスの挨拶を押し付けて」

「いえ、副担任ですから」

山田先生、それは健全な高校男児2名の前では控えてください目のやり場に困ります。

すると千冬姉が教壇の前に立った。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。」

出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛えぬく事だ。逆らってもいいが私の言う事は聞け。いいな」

何処の鬼軍曹だよ、あんた。すると教室を黄色い声援で埋め尽くされた。

「キヤアーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ 千冬様、千冬様よー！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から」

いや、俺まさかの異世界から来たんだけど。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

おいおい、そういうことはあまり言わないほうがいいぞ親御さんが泣くぞ。そんなふうに暴走している女子達を千冬姉は頭を抱えながら見る。

「・・・・・・・・毎年、よくもコレだけ馬鹿者が集まるな、それとも何か？ 私のクラスに馬鹿者を集中させてるのか？」

これがポーズじゃなくて本当に鬱陶しがってるのが千冬姉だ。だがそんな事は関係ないように女子のボルテージは更に上がった。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡して〜」

一部の女子がそう言うともう1度千冬姉は頭を抱えた。

「はあ、なんでこいつも馬鹿が集まったんだ」

「きゃあああ！ その容赦のなさに痺れる！ あk・・・・危ね！」

「百秋、其処を動くな次は当てる」

俺がドサクサにまぎれてネタを仕込んだらチヨークが俺の横を掠めて行つた。というより俺の後ろの奴らも凄いやなあれ避けるなんて。

「チツ、ばれたk・・・・危ね！ パート2！」

今度は凄いスピードで出席簿が飛んできた。コレを白刃取りできた俺も凄いと思うが超至近距離の一夏も避けてる分凄いなと思う。

「それより、さっきの会話からすると織斑君達って、あの千冬様の

弟？」

「ああつ、いいなあ！ 代わって欲しいなあつ！」

「あれ？ でもそうだとしたらおかしくない？ 2人とも同じ学年にいるなんて、もしかして二卵性双生児？」

「いや、俺と織斑先生とは血は繋がってないもちろん一夏ともな」

「そ、そうなんだごめんなさい」

「別に気にしないさ、俺の家族は一夏と織斑先生だ。両親の記憶もないしな」

俺がそう言うつと教室中が変な空気になったが千冬姉がなんとか切り替えたくれた。

「んん、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

さてと俺の学園生活が始まるな、どうやって原作に介入しようかな？

第七話（後書き）

ジエナス「大変お待たせして本当に申し訳ありませんでした。では早速第7回座談会を開始していきましょう！ さて今回のゲストは」

真耶「山田真耶です」

ジエナス「前から読んでも後ろから読んでもヤマダマヤ、我らが1組副担任の山田先生です」

真耶「ひどいですよ。作者さん！」

ジエナス「仕方ないじゃないですかあなたはそういうキャラなんですから」

真耶「うう、ひどいです」

ジエナス「まあまあ、これで涙を拭いてください」

真耶「いいですよ、私はどうせいじられキャラですよ」

ジエナス「やばい、山田先生が拗ねちゃった。仕方ない次回予告と行きましょう。

えっと次回はイギリスのあの方が出てきますね。その後は百秋の設定とISの設定になります」

真耶「どうせ私は、ヒック、生徒に、ヒック」

ジエナス「あ、酒飲み始めちゃったよ。え？ あれ千冬さんのビー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9369w/>

IS<インフィニット・ストラトス>一夏の兄は転生者？

2012年1月4日09時47分発行